

『実務がわかる ハンドブック企業法務』

吉川達夫 / 飯田浩司 編 レクシスネクシス・ジャパン 2,800 円 (本体)

企業法務の全体像を把握するための 好個の一冊

会員 山本 理輝 (65 期)



本書は、企業における法務業務のプロセスや留意点を記載した第1部と、企業法務において頻繁に参照される法律の概要を整理した第2部とに分かれる。

個人的に参照価値が高いと感じたのは、第1部である。

第1部では、一般に「企業法務」と呼ばれる分野のうち、代表的なものがピックアップされているが、この目次を意識して本書を読めば、「企業法務」と括られるところの業務の概要が、かなりのところ把握できると感じられた。

「紛争処理法務」や「労働関係法務」といった括りにおいて、どのような業務が含まれるかは自明であるが、「リーガルオペレーション」や「企画法務」といった括りについては、寡聞にしてどのような業務が含まれるのか一見してわからなかったのが、新たな整理の視点を得られた思いがするところである。

第1部の中でも、特に参照価値が高いと感じられたのは、会社内における法務業務の流れを簡潔に記載した「法務業務プロセス」と題する箇所である。

上記箇所を参照すれば、ある法務の開始から終了までの概括的な流れがわかる上、会社において、外部の弁護士はどの段階で起用されるのかを大まかに把握することができる。

新人の立場からすれば、全体を俯瞰できるという点で有用であるし、一定の経験を積んだ立場からすれば、担当するクライアント（または自社）の業務の流れを改めて体系的に見直す契機となろう。

他方、第1部の随所に示される業務上のノウハウも

極めて有用である。

一例を挙げれば、

「自社ドラフトを相手方に提示する際、MS-Wordフォーマットで『どうぞ検討してください』といった渡し方をすると、変更履歴が大量に含まれた新しいドラフトが示されることが少なくない。一方、自社ドラフトをPDFフォーマットで提示した場合、相手方は変更ドラフトを示しにくいといえる。」

という記述などは法律事務所勤務する弁護士にとっても、社内弁護士にとっても参考になるものと思われる。

第2部においては、簡潔にして要を得た記載で、企業法務を取り扱う際の代表的な法律の概要が説明されている。

ここでは、会社から相談を受けた際、当該法律をどのような視点で読み解いていけばよいかが記載されており、参考になる。

企業法務において、問題となりやすい箇所が、ピンポイントで記載されているので、当該法律を企業法務において用いる際には、どこが問題となるか把握できる点で極めて有用である。

企業法務の全体像を描き出すことを目的とした類書は、他にも散見されるものの、全体の頁数のバランス（分厚すぎず、薄すぎない）や、記載の丁寧さ、扱っている分野の数などの観点から、類書にない良さが多数存在する良書であるといえることができる。

読者の皆様にも、ぜひ一読を勧めたい。